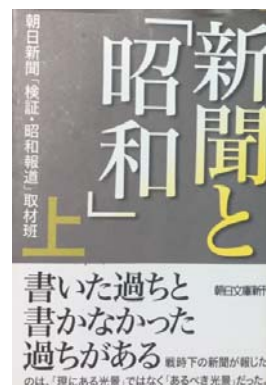


新聞と「昭和」

朝日新聞「検証・昭和報道」取材班による2013年発行「朝日文庫」である。上表紙カバー裏から— 朝日新聞が昭和における自らの報道を徹底検証。新聞はいかに戦争に加担し、その責任はどう総括されたのか。幾多の制約に縛られるなか、記者たちはどこまで真実を伝えたのか。当時の貴重な紙面や証言をもとに「昭和」という時代に迫る、ジャーナリズムの金字塔。



上下2冊で、次の28章と「テーマで見る昭和」から構成されている。

- 1 最後の日 2 恐慌 3 統帥権干犯！ 4 満州某重大事件
- 5 テロの時代 6 神がかりへの道 7 日米開戦へ
- 8 戦時下の大東亜会議 9 産めよ増やせよ
- 10 終戦への秒読み 11 8・15朝刊の謎 12 在外660万人の運命
- 13 占領下の新聞 14 責任の諸相 15 朝鮮戦争と講和
- 16 バンドン会議 17 日ソ復交と国連加盟 18 60年安保
- 19 高度成長と東京五輪 20 公害列島 21 南北朝鮮への視線
- 22 若者の反乱 23 軍事基地—沖縄 24 文革と日中復交
- 25 ロッキード事件 26 石油危機 27 靖国参拝 28 バブル経済

この28章から、激動の昭和史を朝日新聞がどう報じたかが見えてくる。付箋を多くつけて読んだが、とりあえず次の「検証」を紹介しておきたい。

戦時下の新聞が報じたのは「現にある光景」ではなく、「あるべき光景」だった。例えば、空襲の被害を新聞は「軽微」と書いた。事実がどうであれ、被害は「軽微」でなければならなかった。宮城前の写真も、現実の光景より、事前に撮影された写真の方が秩序立っており、「民草」のあるべき姿を示していた。45年8月15日付朝日の「宮城を拝したゞ涙」の記事もそうだ。それは、敗戦に際して「民草」がとるべき態度を書いていた。それを示すことが自分の役目だと記者は考えたのだろう。戦時「報道」の究極の姿がこれであり、再び書かれてはならない「名文」記事だった。

新聞はなぜ、日本のアジア侵略の真相を自ら追及しなかったのか。かつて報じなかった事実を掘り起こし、読者に伝える。そのことを通して、人々を戦争へと駆り立てた自らの責任を明らかにする。そうした作業を経ないまま、新聞は戦後を歩み始めた。

(2016年6月27日)